

感情移入欠如としての偏見 その2

——なぜ人は思い通りに行動できないか——

木村 英 憲

1. はじめに 問題の所在

人は自分の考えや気持ちに従って行動しようと思っても、なかなか踏み出せないことがある。このようなことになるのは、たとえばバンジージャンプのような恐怖にうちふるえてできない場合だったり、いじめの場面に遭遇してとめなくてはと思っても、いじめっ子たちに自分が標的にされるのではと思いきんでしまうといった局面だったりである。そういった制裁が予想されない場合でも、たとえば交通事故の目撃情報を求める看板を見て、もしかしたらあの事故のことかと思っても、警察に行ったら事情を聞かれるのが長時間に及ぶのではと思うと、日常生活のペースが乱されるとか、抱えている仕事や勉強に差し障りが出るかもしれないと思って、市民としての義務を果たさないということに良心の痛みを覚えるまではいかなくても、行動に移さない人が少なくないことだろう。あるいはまわりから浮いてしまうという恐れがある場合や上司や政府といった権力者あるいは専門家といった権威の前には、正義なり良心を抑えてあるいはこれらが麻痺してしまい、行動に移さない場合もあるだろう。

国民性を絡めてこの問題をみれば、集団主義の日本人は人の目を恐れて行動に移さないが、アメリカ人は人の目を恐れることなく行動に移すということはよく言われ当然視されている（トビン1983年、一章、二章）。あるいは権威に弱い日本人は権威の前では萎縮して思い通り行動できないが、権威におもねらない個人主義のアメリカ人はそういうことはないということもよく言われる。

この論文では人の目を気にしないとされるアメ

リカ人がはたして自分の良心なりに従って行動するのかどうか、マイノリティが差別をされている状況に対するアメリカ白人の反応を題材に検討してみたい。

2. 既存の知見から

アメリカ人が人の目を気にしないのかについては、図1に示したハリスの行った調査が反証例を提示している（Harris 1987, p. 44）。

同調については、アッシュの実験とその再試であるフレイガー、佐古らの実験が反証例を提供している（我妻1992年, pp. 49-65）。

アッシュは1グループ学生8人を使い、1本の線に対して3本の長さの違う線を用意し、3本の

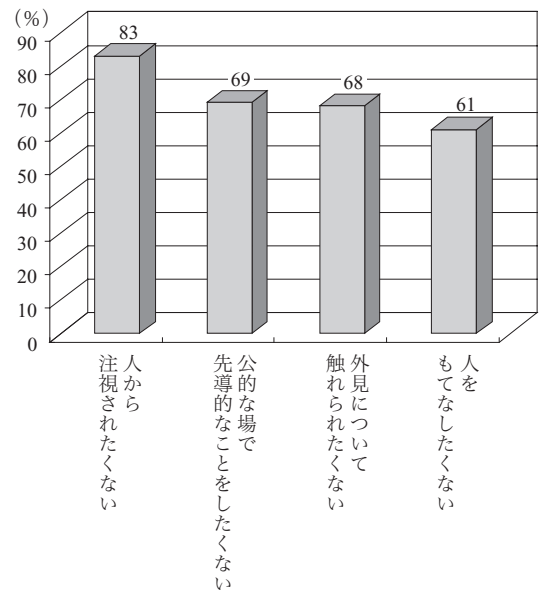


図1 注目されたくないアメリカ人

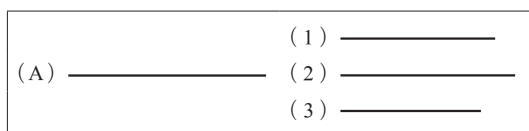


図2 アッシュの実験の概念図 「(A)と同じ長さなのは次のうちのどれか？」という問題

表1 アッシュの実験結果と日本での実験結果との比較

	アメリカ	日本	
実験者	アッシュ Asch	フレイガー Frager	佐古
実験時期	1951年	1966年	1975年
被験者数	50人	128人	22人
同調者数	37人 (74%)	94人 (73.4%)	11人 (50%)
非同調者数	13人 (26%)	34人 (26.6%)	11人 (50%)
同調回数	3.84回	2.92回	2.18回

うちどれが最初の1本と同じ長さかを質問する実験を行った。8人のうち7人はサクラで、あらかじめしめしあわせて、同じ長さではない線と同じ長さだと主張する。すると残りの一人は周囲の影響を受けて自分では違うと思いつつ7人の意見に従う学生が、50人実験した中で37人もいた。一人で実験すると37人のうち35人は正解したものに対してである。

日本人は集団主義のメンタリティを持っていて自分を抑えて同調するとする日本人論が正しいとすれば、このような状況ではほぼ全員が同調するものと予測される。しかし実際は表1に示したように、フレイガーの実験では同調した被験者の出現率において日米で有意な差はみられなかった。同調回数においては日本の方が少なかった。佐古の実験では同調者の出現率、同調回数いずれにおいても日本の方が少なかった。

アッシュは被験者が初対面でその後会うことのない、いわばその場限りの集団にまで同調する動機として、所属願望があるのではと推測している。アッシュ自身の言い方では「集団に帰属し、尊敬され、好まれ、他人の生活にとってもたいせつな役割を果たしていると感じたいという要求が満たされないときに、しばしば自己主張が生じるのである」(我妻1992年, p. 65)。他の人と違うの

では受け入れてくれないという恐れから他の人と同じ反応を示したと考えられる。

自分の思い通りに行動しないパターンに、権威に服従する場合がある。古いところでは第二次世界大戦中の日本人を上からの命令にロボットのように従うというイメージをこれでもかこれでもかと描いたフランク・キャブラ監督の『女の敵日本を知れ』がある(キャブラ1944年)。第二次世界大戦後、ヒットラーの出現を許した心的構造を明らかにする研究が亡命ユダヤ人によってアメリカで行われた。ここから権威主義的パーソナリティという概念が創出され、その存在を実験で確かめる研究も行われた。その代表例がミルグラムによる権威への服従実験である(ミルグラム1995年)。

「記憶に関する実験」ということで、記憶を向上するのに罰を与えられることがどのくらい役立つかということで、実験協力者は別室にいるサクラが思い出しのまちがいを犯すたびに電流を流すように指示された。電流は最初は15ボルトだったのが、まちがいを犯すたびに電流は強まり、最終的には450ボルトまであげられた。サクラ役は苦痛に声を上げもがき苦しんだ。アメリカ人が権威に服従しない自立した個人ならば、実験者から指示されても言うことを聞かなかったはずである。しかし実際は、表2に示したように大学の権

表2 アメリカ人は権威に屈服しないで自分の気持ちに正直に行動するのか

大学	最大450ボルトまで流す 実験協力者の出現率 権威 ない ある 実験者は白衣を 着ていない 着ている		白衣の効果 白衣を着ている人に権威を感じ ないとしたら 実際は 予測されること	
Bridgeport 大学	2.5%	47.5%	2.5%の残りの45%の人は白衣の権威に圧倒されることなく、指示に従わないはずだから、指示に従う人は2.5%のままはず	しかし実際は45% (= 47.5 - 2.5) の人は白衣の権威に圧倒されて、自分を引っ込めて実験者に服従
Yale 大学 (名門)	20%	65%	20%の残りの45%の人は、白衣の権威に圧倒されることなく、指示に従わないはずだから、指示に従う人は20%のままはず	しかし実際は45% (= 65 - 20) の人は白衣の権威に圧倒されて、自分を引っ込めて実験者に服従
大学の権威の効果	17.5ポイント (20 - 2.5) の人は、イェール大学の権威に圧倒されて自分をださないうで、指示に従った	17.5ポイント (65 - 47.5) の人は、イェール大学の権威に圧倒されて自分を出さないうで、指示に従った		

(ミルグラム 1995年, 1章～6章を筆者がまとめたもの)

威と専門家の権威に服従する傾向のあることが判明した。

以上は実験結果からアメリカ人は同調しない、権威に屈服しない強い自我を持った自立した個人というのはイメージ、ありていに言えばステレオタイプであることが言えそうである。

3. 人種隔離撤廃への態度

古くから人種、信条、宗教の異なる人々が互いを認め合いながら混じり合って暮らしている国というイメージがアメリカに対してはメルティングポットやサラダボールの言葉によって再生産されてきた。そしてやる気さえあれば、チャンスが平等に開かれているアメリカでは、誰でも親の代より豊かになれるとするアメリカンドリームもアメリカについてすぐ連想されるイメージである。

しかしこれらのイメージも覆すものがある。そ

れは黒人、ヒスパニック系やアジア系への偏見、差別であり、さらには同じ白人でもニューブリードと称され、アイルランド、イタリア、東欧からの移民達への偏見、差別である。後者はカトリック教徒としてひとくりにされたり、あるいはそれぞれの出身国別のステレオタイプによって蔑視され、また住宅地域、職場から排除されたり攻撃の対象となった。

アメリカ人を心的に動かすエートスに親の代より豊かになって自己の存在価値を自他に証明したいという価値観ないしは感情がある。このアメリカンドリームにかかる価値観と感情と、人種間あるいは民族間の平等な処遇、他方、マイノリティ集団への偏見や排除の心情、これら3つと、集団に所属したいという帰属願望は必ずしも調和するものではなく、互いに矛盾する傾向がある。

この矛盾を人種的偏見（その欠如としての人種

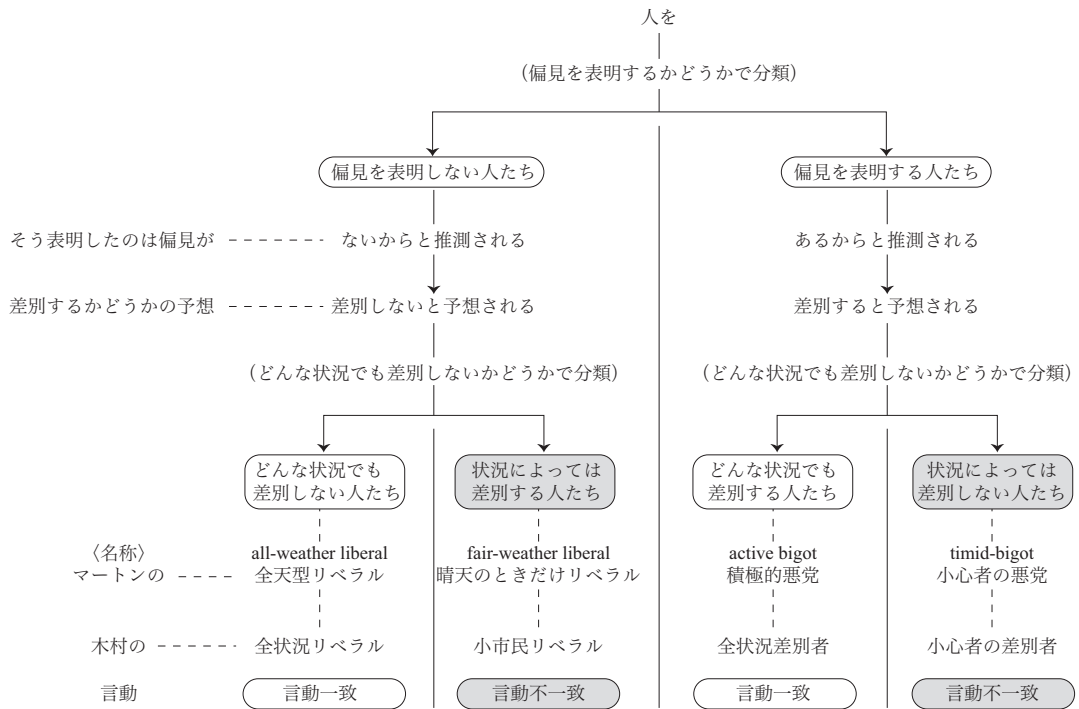


図3 マートンの類型

間平等意識)と行動としての差別の間の矛盾として考察した人物にロバート・マートンがいる。マートンはこの矛盾から4つの人間類型があると提唱した(Merton 1976)。

思い通りに行動できる人間とそうでない人間を偏見と差別の局面で分けたとき、前者にはどんなときでも表明した態度(マイノリティにたいする否定的な特徴付けへの否定)通り差別をしない「全状況リベラル」がいる。他方でどんなときでも表明した態度(マイノリティにたいする否定的な特徴付けへの肯定)通り差別する「全状況差別者」もいる。

思い通りに行動できない後者には、状況によっては(天候で言えば晴天や快晴のときは)表明した態度(マイノリティにたいする否定的な特徴付けへの否定)通り差別しないが、状況によっては(曇りや雨といった悪天候のときは)表明した態度とは裏腹に差別する「小市民リベラル」がいる。逆に状況によっては(曇りや雨といった悪天

候のときは)表明した態度(マイノリティにたいする否定的な特徴付けへの肯定)に反して、差別を控える「小心者の差別者」もいる。

マートンの類型を間接的に裏付けるデータ

1940年代から不定期に行われている全米を母集団としたサンプル調査がいくつかある(Schuman 他 1997)。これらを、差別や隔離の撤廃への反対を総論、一般論あるいは理念の上でも反対する回答者が出現したパーセントと法的制裁をともなった隔離撤廃(各論)への反対に分けてみて、さらにこれらの二つの反対の次元を領域別にみて、反対する回答者の出現率の変動の平均をとって見たのが、表3である。

どの領域でも法的制裁を伴う措置は隔離撤廃への実効性をともなったものである。どの領域でも理念としての反対者の出現率より措置に対する反対率の方が大きい。理念では反対していなかった回答者が、強制力のともなう措置になると反対に転じる回答者(小市民リベラル)が存在するとい

表3 理念・措置の両次元への反対を領域によって変動があるか見てみると

反対の次元	理念	領域					
		一般	公共	就職	学校	住宅地	結婚
反対の次元	理念	15%	21%	7%	20%	13%	40%
	法的制裁をとまう措置	—	44%	64%	64%	58%	67%
理念としては隔離撤廃に反対していなかったが 実効性を伴う措置になると反対する回答者の割合		—	23%	57%	44%	45%	27%

うことである。理念の上ではマイノリティ集団のメンバーへの差別・隔離・排除に反対というリベラルな立場を表明するも、あるいは明確には反対を表明しないが、実効性を伴った措置によって接触が現実のものとなると、リベラルな思いに反して反対に回るということであろう。

マイノリティ集団のメンバーとの接触を厭うものは、領域が身近なものになるにつれ、その出現率が大きくなる傾向のあることが、理念と措置の両次元について表3から読みとれる。理念の次元ではこぼこしているが、接触が現実のものとなる確率の大きな措置の次元に対しては、本音を抑えにくくなり出やすくなると考えると、身近な領域になるにつれて隔離撤廃に反対する傾向がよりきれいに出ている。

両次元の間の落差の激しいのは就職と住宅地である。これは人種間平等の理念が、少なくとも建前としてはアメリカ人の間で内面化されているからと思われる。しかし本音としては接触を回避するのがアンケートというバーチャルな空間においても、就職の場合は9倍、住宅地では4.5倍も増えている。

なぜこのような落差が生じるかの説明の仕方としては、いくつかの説明がある。一つは、偏見や差別をしようとする気持ちが潜在化したものの、実効力のある措置の前に浮上したという説明である。人種間平等の理念が社会的に正当な立場として力を得てきているのに反して、偏見や差別を是としない世論が教育、法律、反差別の運動によって浸透したために、偏見や差別をしようとする気持ちが抑圧されて潜在化したものの、措置の前には封印が解かれ、浮上したという説明である。

しかしこの説を否定する説もある。ボランティア

ズム説という説 (Lipset and Schneider 1978, pp. 43-44; Taylor 1986) である。この説によれば強制力を伴う法律や行政命令によって地方なり中央の政府が市民の間の問題に介入するのは、市民の間で自発的にまた自らの力で解決しようとするアメリカの国是とも国民感情とも言える個人主義の信条を犯すものだから、措置のレベルの隔離撤廃への反対率が増えるのであって、人種的偏見のためではないとするものである。

このボランティアズム説には難点がある。それは、公権力の介入を自助努力の精神を脅かすものだから反対するというなら、なぜ身近な領域以外での反対率は低く、身近な領域、とくに結婚になると反対率が増大するかの説明がつかない。ボランティアズム説の難点であるこの傾向は、偏見は一般に対象集団への認知、感情と準備された行動の三側面からなるという知見を使うと説明ができる。

対象集団への認知というのは、恣意的な選択 (singling-out) と過剰な一般化と差別的な評価 (differential evaluation) によってなされた歪められた認識のことである。

恣意的な選択というのは、対象集団の所得水準、学歴、失業率、犯罪率、パーソナリティ、ライフスタイルなどの諸特性のうち、恣意的に否定規則面のみが取り出され (e.g. 犯罪率の高さ)、対象集団の人間は全員対応するパーソナリティをみな持っているという過剰な一般化をし (e.g. 黒人はみな犯罪性向がある)、そして犯罪率の高さをパーソナリティや下位集団文化に還元し (e.g. 黒人ははみな犯罪への衝動を生まれもって持ち合わせていて、しかも抑制力がない、そういうパーソナリティを持ち合わせている、あるいは犯罪

表4 偏見を表明したのに隔離撤廃を支持する謎、偏見ないのに反対する謎

		住宅隔離撤廃の理念に		住宅隔離撤廃の措置に	
		12%が反対	88%が賛成	65%が反対	35%が賛成
「黒人犯罪温床」に	同意した 31% (偏見を表明した)	撤廃の理念にステレオタイプを表明した31%全員反対して、31%になるはず。しかし実際は表明した偏見通りに撤廃理念に19ポイント少ない12%しか反対しなかった。この12%の者は〈全状況差別者〉	ということは31%の残りの19%の者は偏見を表明しているのに撤廃賛成に回った可能性大 〈小心者の差別者〉	撤廃の措置にステレオタイプを表明した31%全員が撤廃措置に反対するはず〈全状況差別者〉 しかし実際は、34ポイント上回る65%も反対（措置になると増える反対者）	
	同意しなかった 69% (偏見表明せず)		〈全状況リベラル〉ステレオタイプに不同意の69%は全員理念に賛成するはずしかし実際は19ポイント余分な88%なのは、上の小心者の差別者が賛成したため	この69%のうち34%は偏見を表明していないのに撤廃措置に反対に回った 〈小市民リベラル〉	35%は偏見を表明せずなおかつ撤廃に賛成 〈全状況リベラル〉

データは1976年時点のもの。ステレオタイプはRose 1990年, 173頁から。隔離撤廃はSchumanら1997年。

を悪とみなさない、むしろ英雄的行為とみなす下位文化にそまっているから犯罪を平気で犯し、結果、犯罪率が高いというストーリー)、歪められた認知は完成する。

この歪められた認知は対応した感情を生みだす。そのような認知を持たれた対象集団にたいしては恐れ、憎しみなどの感情がわく。そして接触を回避したいという気持ちから排除という行動が心理的に用意される。あるいは憎しみからは、先制攻撃をしたいという気持ちから暴力という行動が用意される。

歪められた認知は、他方、自集団についての肯定的なイメージ、アイデンティティを保持する上で都合のいい見方でもある。それは過小評価と中和化、差別の逆転によってなされる。

過小評価というのは、自集団のメンバーに否定的な特性を持ったものがない、たとえば万引きする少年グループが発覚しても、過剰な一般化と反対にそういう少年は例外視する。例外視ができない場合は、動機や意図を出来心といった悪意のないものにして、あるいは元々なかったものが外的条件、たとえばメディアにそそのかされてとい

う具合に過小評価する。例外視や過小評価できない局面では、中和化と評価上の差別がなされる。中和化というのは、少年にはよくあることで成長するにつれてやらなくなるというような論理である。評価の逆転とは、たとえばこういう軽犯罪でガス抜きをすることによって、大きな犯罪にいたらないといった、万引きに肯定的な評価を下すことである。かくして自集団のメンバーによる逸脱行為が発生しても、自集団への肯定的なイメージ、アイデンティティは守られる。

しかし自集団のメンバーによる逸脱行為にはこのようなあまい認知がなされるが、同じことをマイノリティ集団のメンバーがした場合は、逆の厳しい認知がされる。その意味で偏見の真骨頂は評価上の差別ということになる。

さてマイノリティ集団との隔離撤廃への反対率が身近な領域になるにつれ増大するのは、このように歪められた認知によってもたらされた否定的感情が、身近なものになるほど否定的感情が強く喚起されると考えると説明がつく。ちなみに理念から措置になっても反対率が増大するのも、接触が現実的なものになって、否定的感情が喚起され

ると考えると説明がつく。

この推測を裏付けるデータが表4に示したデータである。

4. 被差別の状況への反応

調査の概要

マイノリティ集団のメンバーへの偏見がないというのはどういうことであろうか。隔離撤廃を理念だけでなく、措置を支持するという態度があるとき、そこには偏見がないと言えそうである。なぜなら恐怖心や蔑視がなく、故に接触を厭う理由がないからである。同じ理由に、隔離撤廃の措置が身近な領域になっても厭わないはずである。しかし措置への賛成か反対かという態度表明というのは、具体的な状況でマイノリティ集団のメンバーが差別をされているときにどういう反応をするかと比べると、恐怖心の喚起、集団への帰属欲求から来る同調、アメリカンドリーム達成による自分の価値の証明へのリスクの点でインパクトが少ないように思える。

そこでマイノリティのメンバーが差別されている状況をプロの役者が演技しているビニエットを見せ、どのように反応するかという言葉で被差別の状況を提示しその反応を測定する質問を作成するという調査を設計し、実施した(木村1987, 1988, 1991)。筆者は1985年にボストン在住の非白人8人とボストン在住の白人319人、計327人を対象にした質問紙調査のチームに参加し、調査の設計、質問紙の素案を作成した。

マイノリティがマジョリティに何らかの差別をされている場面を含んだ7つのスキット(ビニエット、ビデオでドラマ化されているもの)を見せ、差別場面にどのように反応するかという質問紙に答えてもらった。

この回答者たちのプロフィールは表5～9の通りである。

この回答者たちの人種を見ると、白人が全米の比率、マサチューセッツ州の比率を上まわっており、その分、黒人、アジア系が少ない。

表5 サンプル男女構成比

	男性	女性	合計
ボストン・サンプル	137人 (44.6%)	170人 (55.4%)	307人
マサチューセッツ州	2,888,745人 (48.0%)	3,127,680人 (52.0%)	6,016,425人
全米	121,239,418人 (48.7%)	127,470,455人 (51.3%)	248,709,873人

合計が307人なのはこの調査の回答者(ボストン・サンプル)327人中、20人が回答しなかったため。

表6 サンプル人種(自己申告)

	白人	アラブ	アジア系	黒人	合計
ボストン・サンプル	294人(97.4%)	1人(0.3%)	2人(0.7%)	5人(1.7%)	302人
マサチューセッツ州	5,405,374人(89.8%)	—	143,392人(2.4%)	300,130人(5.0%)	6,016,425人
全米1980	188,371,622人(80.3%)	—	3,500,439人(1.5%)	26,495,025人(11.7%)	226,542,203人
全米1990	199,686,070人(81.7%)	—	7,273,662人(2.9%)	29,986,060人(12.1%)	248,709,873人

合計が302人なのは25人が回答しなかったため。

マサチューセッツ州の統計は1990年の国勢調査。全米の統計は1980年と1990年の国勢調査の統計。マサチューセッツ、国勢調査の合計は行の合計ではなく、ほかの人種を入れて合計したもの。

出典：Sam Roberts. 1995. *Who We Are: A Portrait of America Based on the Latest U.S. Census*, 279, 282頁

表7 年齢

10代	7人 (2.3%)
20代	71人 (22.9%)
30代	61人 (19.7%)
40代	58人 (18.8%)
50代	50人 (16.2%)
60代	45人 (14.6%)
70代以上	18人 (5.8%)
合計	309人(100.0%)

最年少11歳 最年長84歳
平均年齢 43.4歳
標準偏差 16.0歳

表8 就業状況

職に就いている	195人 (62.7%)
パートタイム	30人 (9.6%)
学生	15人 (4.8%)
定年退職後	37人 (11.9%)
専業主婦	22人 (7.1%)
失業中	9人 (2.9%)
その他	3人 (1.0%)
合計	311人(100.0%)

表9 仕事の種

事務職	30人 (11.4%)
非熟練、半熟練労働者	15人 (5.7%)
熟練労働者	42人 (16.0%)
小企業自営	20人 (7.6%)
専門職	65人 (24.7%)
管理職	38人 (14.4%)
重役	17人 (6.5%)
主婦	10人 (3.8%)
監督者	20人 (7.6%)
営業	6人 (2.3%)
合計	263人(100.0%)

5. 調査結果

被差別状況を見ての反応には表10で示したものがあり、偏見の有無によって回答は表10に示したように予測される。

状況

トヨタ車にのった穏和そうな黒人の親子（父親とティーンエージャーの息子）が白人住宅街で人を待っていた。パトロール中の二人の白人警官がこの車のそばを通ったが、乗っているのが黒人であるということで不審に思い引き返した（付録、場面1参照）。一人の警官が犯罪者に対するようなきつい調子で父親に何でいるのかきき、身分証明書の提示を求めた。その間、もう一人の警官が車の後ろに回り盗難車かどうかをチェックした。

助手席に座って様子を見ていた息子は、警官が立ち去ってから理不尽な警官の言い方に対し何で抗議をしないで言いなりになっていたのかと父親にいらだちをおぼえ責めたというものである。具体的なやりとりは付録を参照のこと。

パトロール中の警官が引き返し職務質問したのは、トヨタの二人が黒人だからで、それは二人は立派な市民には見えないあやしい＝犯罪をおかすべくターゲットを探しているか何かに見えたからであろう。だからこそ一人が盗難車かどうか車の後ろに回ってチェックし、もう一人が何をしているのか理由や身分証明書の提示を求めたりしたのである。言葉には出さないが黒人親子を態度や行

為によって犯罪者扱いしたのである。しかし盗難車であることを示すものは出てこなかった。警官は謝罪もせず通常のチェックだと言って立ち去った。この二人が白人だったら、そもそも引き返し尋問したり、盗難車かどうかのチェックをするなどということはしなかったかもしれない。そう考えると、警官の取った行為は差別的処遇という意味での差別である。

予測

偏見を持っていない第三者なら、警官が引き返したこと、チェックし尋問をしたことは白人ならしない差別だと認識をすることだろう。そして二人を犯罪者扱いした警官の行為に不快感や怒りを感じるだろう。そしてこのような取り扱いを受けた二人の気持ちはいかばかりだろうと、心中を察することだろう。

しかし偏見を持っている白人の目にはこのようには映らない。彼らにとって黒人は犯罪を犯すかもしれない人間だからである。その黒人が白人住宅地域にいただけで、何か危害を加えられるのではという恐怖心を喚起されることであろう。したがって恐怖心を抱いている白人住民にとって、引き返して尋問し盗難車かどうかチェックするという白人警官の取った行動は、犯罪が起きたかどうか調べる正当な行為と映ることであろう。また尋問することによって黒人親子におまえ達は監視されているというメッセージを送ることで早く立ちさせようとする正当な行為とも思えるこ

感情移入欠如としての偏見 その2 (木村)

表10 偏見の有無と被差別の認知、共感

	予測される回答	
	偏見がない人たち	偏見がある人たち
1 差別を差別として認識するかどうか	認める	認めない
2 判断不能とする不可知論に	与しない	与する
3 差別を差別とするとらえ方への賛否	賛同する	賛同しない
4 差別でないとするらえ方(中和化、逆転)への賛否	賛同しない	賛同する
5 共感 被差別者の気持ちになって被差別の行為をみるか	見る (共感する)	みない (共感しない)

表11 偏見を一般論と各論で測定すると出てくるギャップ

			一般論 黒人は犯罪の 温床	各論 親子に怪しい ところがある	怪しい-温床	
					人数	%の差
偏見が	強い	強く同意する	6人 (1.9%)	9人 (2.8%)	+3人	0.9
	ある	同意する	19人 (5.9%)	59人 (18.4%)	+40人	12.5
態度不表明		分からない	58人 (18.1%)	46人 (14.3%)	-12人	3.7
偏見が	ない	同意しない	146人 (45.6%)	133人 (41.4%)	-13人	-4.2
	全くない	強く同意しない	91人 (28.4%)	74人 (23.1%)	-17人	-5.3

とだろう。恐怖心がさっと条件反射のように出てしまう彼らは警官にうまく押さえ込んでほしいと思っていることだろう。そのような彼らはいわば警官の肩越しに黒人親子を見ているのであって、親子に視点を置いて親子には警官の態度、取り扱いはどのように映じたのか、どんな気持ちでいたのか感情移入する余裕はないことだろう。

判明したこと

はたして回答者の回答はこの推測通りだったろうか。偏見を持っているかどうかは一般論で「たいていの犯罪は黒人が犯す」という質問と、この状況で犯罪を犯すのではないかと予断でみるかどうかでもって「親子には怪しい様子がうかがえる」という各論の質問で聞いてみた。回答は表11の通りである。具体的な状況の方が二人を怪しいと偏見の目で見る回答者が増えた。

予想を裏切るタイプの一つ、各論でも偏見を表明しなかった、すなわち親子には怪しいところはないと言った217人のうち、警官の尋問を差別と認めない小市民レベルがいる。彼らが顔を現す確率は、表に示した質問によって異なるが、警官の尋問を正当とみなした134人は内心では怪しい

と思っていた、すなわち内心では親子に何か犯罪をしそうだと思っていた可能性がある。これら小市民レベルは親子に共感するどうかで見て、小市民レベルが10人顔を出す。

表12にその結果を示したクロス集計表では各タイプが出現する確率にばらつきが出た。そこで各質問に回答者が答えるとき、直接は観察できない回答者のマイノリティへの心的態度に影響されていると推測すると、このような影響を与える潜在的な心的態度を探り出して、その潜在的な因子によって次に行った分析を行うと、どうなるであろうか。

黒人親子に警官が尋問するピニエットの質問を回答者が回答するのに影響を与える因子を取り出す分析、すなわち因子分析にかけた結果が表13である。2つの因子が発見された。因子1は警官のしたことを差別と認知するかどうか、差別された黒人親子への共感にかかわる因子である。そこで因子1を「差別認知・被差別共感因子」と名付ける。因子2は回答者の黒人への「偏見因子」である。

回答者はそれぞれの因子を強く持っていたりあ

表12 偏見の有無から予想通り、差別と認められたかどうか、親子に共感したかどうか

	親子を怪しいと			
	は言わなかった		言った	
	差別と認めた 全状況レベル	のに差別と認めない 小市民レベル	のに差別と認めた 小心者の差別者	差別と認めなかった 全状況差別者
警官の尋問は正当 だったか	72人 (23.2%)	134人 (43.1%)	4人 (1.3%)	17人 (5.5%)
警官の態度は差別的 だった	105人 (33.5%)	60人 (19.2%)	10人 (3.1%)	50人 (16.0%)
警官は地域を守っ ていただけ	52人 (16.4%)	101人 (36.8%)	10人 (3.1%)	66人 (20.8%)
親子が白人なら尋 問しない	126人 (33.3%)	34人 (10.6%)	12人 (3.7%)	43人 (13.4%)
親子が憤って当然 だ (共感)	168人 (58.0%)	32人 (10.1%)	24人 (7.6%)	32人 (10.1%)

表13 警官と黒人親子の質問の因子

質問 (一部略)	因子1 差別認知・被差別者共感因子	因子2 偏見因子
警官の尋問は正当か		.895
警官の行動は差別的だ		.804
警官は嫌がらせをした		.786
警官はただ地域を守っているだけ		-.725
もし親子が白人だったら尋問しなかつただろう		.624
二人はいきどおりを覚える権利があり (憤るのも無理はない)		.541
親子は立派な市民の風貌をしている	-.764	
たいていの犯罪は黒人が犯す	.544	
因子寄与率	4.345	1.298
すべての質問への回答の分散が各因子によって説明される%	43.3%	8.4%

注：主因子解の後、プロマックスによる斜交回転。

空欄のところは、因子によって各質問項目が影響を受けている度合いを示す因子負荷量が.3以下のもの

るいは弱く持っていたりする。その因子に規定される度合いを点数化したのが因子得点と呼ばれるものである。各人の差別認知・共感因子の得点と偏見因子の得点を用いて、回答者を分類してみる。その分類の手法はクラスター分析と呼ばれるものであるが、グループ内平均連結法によるクラスター分析をしてみたら、図4に示したように4グループが発見された。図4を表にして提示したのが表14である。

これらのタイプはどのような人口動態的な人たちから突出して出現するのかをみるためにクロス集計をかけてみた。英語以外の外国が話せるかど

うか、人種、アメリカ生まれかどうか、住んでいる地域別にみても平均出現率より多いとか少ないといった点で有意な差はみられなかった。しかし性別、職業、宗教の違いは表15に示したような有意な差が見られた。

次に疎外感の強弱、有無によってこれらの4タイプの出現率に差がみられるかどうか、クロス集計をかけてみてたら、表16ようになった。

これらのタイプは人口動態要因、疎外感のうちどのようにもっと強く影響を受けて出現するのか、次にどの要因によって出現するのか決定木分析をかけた結果が表17である。この表が示すと

感情移入欠如としての偏見 その2 (木村)

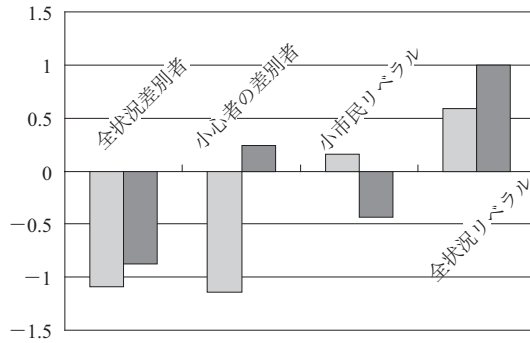


図4 クラスタ分析の結果, 発見された4グループ

表14 4クラスターの人数と構成比と各因子の平均因子得点

	人数と構成比	偏見	平均因子得点	認知・共感	平均因子得点
全状況差別者	53人 (17.1%)	あり	-1.092	しない	-.872
小心者の差別者	20人 (6.5%)	あり	-1.138	する	.236
小市民リベラル	134人 (43.2%)	ない	.162	しない	-.439
全状況リベラル	103人 (33.2%)	ない	.586	する	1.000

注：一元配置の分散分析で有意

表15 4タイプの出現率に影響を及ぼす人口動態上の要因

	平均出現率	男女		就業状況	仕事の種類	宗教
		男	女			
全状況差別者	17.1%			退職者 30.6% 正規雇用 12.4%	半熟連工 38.5%	
小心者の差別者	6.5%					
小市民リベラル	43.2%	50.0%	38.7%	正規雇用 44.5%	熟練工 55.4%	カトリック 46.3%
全状況リベラル	33.2%			退職者 19.4%		

注：ブランクのところは平均出現率と有意な差がない出現率であったということ。以下、同じ。
たとえば、全状況差別者は男女とも17.1%、宗教でもプロテスタント・カトリックのちがいがなく17.1%であったということである。

表16 4タイプの出現率への疎外感の影響を及ぼす人口動態上の要因

	平均出現率	人間性からしたら戦争や争い事は不可避	誰も信頼できない	捕まるのが怖くて正直にしているだけ
全状況差別者	15.8%		同意 22.3%	
小心者の差別者	32.9%			
小市民リベラル	39.5%			
全状況リベラル	32.9%	強く不同意 68.8%	同意 25.5%	
		同意 27.2%		

表17 職業と4タイプ

	平均 出現率	自営業, 中小企業 の99人	自営業, 中小企業, 専門職の63人	専門職, 管理 職の37人	管理職と無回 答者100人
全状況差別者	15.8%	18.2%	4.8%	10.8%	22.2%
小心者の差別者	32.9%	46.5%	11.1%	18.9%	6.0%
小市民リベラル	39.5%	14.1%	28.6%	36.1%	43.0%
全状況リベラル	32.9%	22.2%	65.6%	35.1%	29.0%

注：1%水準で有意。網かけをしたところは突出しているところ

ころによれば、諸要因のなかで影響を及ぼすのは
どういう仕事に就いているかである。

各タイプ毎に平均出現率を上回っている仕事を
みると、全状況差別者は、管理職と無回答の100
人からがもっとも多い。小心者の差別者について
は自営業、中小企業からの出現率が高い。小市民
リベラルは、管理職と無回答者からの出現率が高
い。全状況リベラルは、自営業、中小企業、専門
職からの出現率が高い。

6. 最後に

小市民リベラルと名付けたタイプの人たちは、
隠し持っている偏見を状況の持つ力によって隠し
きれなくなった人たちという解釈をした。しかし
このタイプの人たちには、差別はしたくないとい
う気持ちを持っているサブタイプの存在も考えら
れる。その人たちは、白人住宅街の住民に帰属し
たいという欲求や、黒人が引っ越してくると持ち
家の不動産価格が下がるというのが事実ではない
にしても、事実かどうか黒人を受け入れて確かめ
るというリスクを冒したくないという気持ちの前
に、腰砕けになってしまっているのかもしれない。
住宅統合を要求するマイノリティへの反感など
他の複数の要因と絡めて解析したらこの問題が
どのくらい解明できるものかを今後の課題とし
てこの稿を終えることにする。

参考文献

(人名はアルファベット順、欧米人の名前は先にきて
いるのは姓。しかし複数著者、編者の場合、二人目
から名前、姓の順。続いて刊行、発行年。)
木村英憲. 1993. 「潜在化した差別意識の規定要因

——接触のコストと大義名分による友対の正当性」
『愛知学院大学文学部紀要』23: 51-82頁。

——. 1998. 「感情移入欠如としての偏見——恐が
り屋であいまいが好きな『小市民リベラル』」『愛知
学院大学人間文化研究所紀要人間文化』第13号。
ジョセフ・トビン. 1983. 『ニッポン幻想——〈甘え〉
から見た日米比較』。講談社。

スタンレー・ミルグラム. 岸田秀訳. 1995. 『服従の
心理——アイヒマン実験』。河出書房新社。

鳥居泰彦監訳. 1996. 『現代アメリカデータ総覧
1995』。原書房。

我妻洋. 1992. 『社会心理学入門(上)』。講談社。

Allport, Gordon. 1954. *The Nature of Prejudice*. Addison-
Wesley.

Blauner, Bob. 1989. *Black Lives, White Lives: Three
Decades of Racial Relations in America*. University of
California Press.

Capra, Frank. 1944. *Know Your Enemy: Japan*. (『汝の敵
日本を知れ』)

Feagan, Joe and Herna Vera. 1995. *White Racism: The
Basics*. Routledge.

Harris, Louis. 1987. *Inside America*. Vintage Books.

Kimura, Hidenori. 1987. "Situational Variables as
Immediate Social Forces Affecting Attitude—Behavior
Discrepancy in Interracial Interaction Setting". 『愛知学
院大学文学部紀要』16: 56-82頁。

——. 1988. "Impact of Ethnic Stereotyping". 『愛知学
院大学人間文化研究所紀要人間文化』4: 83-114頁。

——. 1990. "The Findings of a Questionnaire of the
Ethnic Prejudice Study". 『愛知学院大学人間文化研
究所紀要人間文化』4: 83-114頁。

Lipset, Seymour M. and William Schneider. 1978. "The
Bakke Case: How Would It Be Decided at the Bar of
Public Opinion?". *Public Opinion* March/April: 38-44.

Merton, Robert. 1976. "Discrimination and American
Creeds". *Sociological Ambivalence and Other Essays*:
189-261.

感情移入欠如としての偏見 その2 (木村)

- Roberts, Sam. 1995. *Who We Are: A Portrait of America Based on the Latest U.S. Census*. Times Books.
- Rose, Peter. 1990. *They and We: Racial and Ethnic Relations in the United States*. McGraw Hill.
- Schuman, Howard, Charlotte Steeth, Lawrence Bobo and Maria Krysan. 1997. *Racial Attitudes in America: Trends and Interpretations (Revised Edition)*. Cambridge: Harvard University Press.
- Taylor, Garth D. 1989. *Public Opinion & Collective Action: The Boston School Desegregation of Conflict*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Terkel, Studs. *Race: How Blacks and Whites Think and Feel about the American Obsession*. The New Press.
- Tiho, Alex. 1994. *Sociology: Brief Introduction*. Harper Collins College Publishers.
- Wellman, David. 1977. *Portraits of White Racism*. Cambridge University Press.

付 録

本文中で分析したピニエット

英文テキスト	日本語訳
<p>Setting: A white residential areas Characters: A black man (Black 1), his son (Black 2) and two white policemen</p>	<p>場 所：白人住宅街 登場人物：黒人男性（黒人父），その息子（黒人息子），二人の白人男性警官</p>
<p>Police 1: Quite day, huh? Police 2: Hey, did you notice that? Police 1: What? Police 2: The two back guys in the Toyota. Police 1: That's unusual, isn't it? Police 2: Sure is around here. Let's run a check on the car just to be safe. Police 1: You can call it in. I'll chek it out.</p>	<p>場面 1 警官 1：静かな日だな。 警官 2：おい，あれを見ろよ。 警官 1：あれって？ 警官 2：トヨタの黒人二人だよ。 警官 1：ちょっとめずらしいな。 警官 2：この辺ではちょっとないよな。念のためにちょっと調べてみよう。 警官 1：じゃおれは質問するから，君は署に電話を入れてくれ。</p>
<p>Police 1: Is there anything I can do for you guys? Black 1 : No, that's OK. Police 1: Do you live around here? Black 1 : No, we don't. Police 1: Would you get out of the car? Black 1 : Why? Police 1: Please get out of the car. Do you have some identification? Why are you parked here?</p>	<p>場面 2 警官 1：何か困ったことでも？ 黒人父：いえ，別に。 警官 1：このあたりにお住まいですか？ 黒人父：いいえ，ちがいます。 警官 1：ちょっと車から出てもらえませんか。 黒人父：どうしてですか。 警官 1：とにかく車から出てください。何か身分を証明するものありますか。どうして車をとめているのですか？</p>
<p>Black 1 : Look, officer. My son and I are just waiting for someone. What's the problem? Police 1: No problem. Police 2: Car's fine. Police 1: OK. Just a routine check. Black 1 : Yeah, routine! Police 2: What's he getting upset about? Police 1: I don't know. No harm done.</p>	<p>黒人父：あのですね，お巡りさん。息子と私は人を待っているだけです。いけないですか？ 警官 1：いいえ，別に。 警官 2：(警官 1 に向かって) 別に問題はない。 警官 1：わかった。(黒人 1 に向かって) 通常のチェックなだけです。 黒人父：そう，通常のね。 警官 2：(警官 1 に向かって) あいつ，なにを怒っているのだ？ 警官 1：わからない。でもなにも害は加えられてないから。</p>
<p>Black 2 : We should report them. Black 1 : For what? Black 2 : I don't know. Black 1 : Hey, forget it. It does sure make you mad, though, doesn't it? I guess they just wanted to know why we were here. Black 2 : I didn't know we needed a reason.</p>	<p>場面 3 (警官が立ちさってから) 黒人息子：あの二人，訴えようよ。 黒人父：何をしたって？ 黒人息子：わからないよ。 黒人父：まあ，気にするなって。でもたしかにあたまにくるわな。まあ，われわれがここにいるわけでも知りたかったのだろう。 黒人息子：車をとめるのに理由があるだなんて，知らなかったよ。</p>